

北京日本学研究中心

通 讯

《第 9 号》

责任编辑：山下纪久枝 谯燕 邮编：100081 Tel: 890351--584 1991.3.15

简 讯

◎寒假结束，新学期开始了。学期之初，中心的日方派遣教师正处在新旧交换阶段，日方主任教授，主任教授助理，事务主任都将易人。在此，对已经期满归国、和即将期满归国的日方各位专家表示衷心的感谢，并对新来的各位专家表示热烈的欢迎。本学期新派遣专家名单见另页。

◎中心第4次硕士学位论文答辩的准备工作已经开始，今年的日程与往年有所变动，答辩日期将提前到今年9月中旬，情况大致如下：

3月1日开始报名，4月1日报名截止，6月1日论文提交截止，9月中旬答辩。

中心已发出有关答辩报名的通知，请申请答辩的同学届时按有关规定报名。

◎为方便日本学研究中心的工作和日本专家的教学、研究工作，日本国际交流基金赠送日研中心一辆面包车。赠车仪式于1991年2月12日上午11时许，在北京外语学院专家楼餐厅举行，参加赠车仪式的有国家教育委员会国际合作司赵永魁副司长、阎丽同志，北京外国语学院王福祥院长、外事处杨荫恩处长，北京日本学研究中心李书成代理主任、陈海良副主任，和日本驻华大使馆公使荒义尚、一秘山崎正亲，北京日本学研究中心户川芳郎主任教授，以及部分日本专家等。

◎1991年2月13日，“中心”第5期研究生赴日，开始了为期半年的研修学习。教师班（助教班）的赴日研修日期从历年的2月改为6月中旬。

◎1991年3月28日，将进行这学期每周一次的公开讲座的第一讲。讲座题目见另页。

1991年3月～1991年7月 日本側派遣教授一覽

氏名	現職	担当科目	公開講座題目
佐藤 保	お茶の水女子大学教授 (センター主任教授)	日中文学・文化比較研究	明治期における日中詩人の交流
杉山晃一	東北大学文学部附属日 本文化研究施設教授 (センター社会・文化コース副主任)	社会文化論 社会文化論演習	稲のまつり
山田真一	高岡短期大学講師 (センター主任教授補佐)	日中言語比較論	中日辞典をめぐる
篠崎信夫	国際交流基金嘱託 (日本側事務主任)		
甲斐睦郎	国立国語研究所言語教 育部長	日本語学概論	国語教育に於ける言語教育の現状
武部良明	元早稲田大学教授	日本語学概論	演説体日本語について
田原嗣郎	北海道大学名誉教授	日本思想史 日本思想史演習 日本文化・思想史	日本の公と私
土屋英雄	高岡法科大学助教授	日本法制 現代日本社会・法制	資本主義国における国家と宗教
東郷吉男	静岡県立大学教授	音声音韻論 日本語学研究 I 日本語学演習 I	日本語の動詞の語構成をめぐる てー現代語を中心にー
鳥居邦朗	武蔵大学教授	日本近現代文学 日本近現代文学演習 日本文学論 (近現代)	「迷路」を読むー中日戦争下の日本人ー
野口元大	上智大学教授 (センター言語・文学コース 副主任)	日本古典文学 日本古典文学演習 日本文学論 (古典)	仮名書法の発達と美
村上雅孝	東北大学教授 (センター研修コース副主任)	日本語学研究2 日本語学演習2 日本語学各論	漢文訓読の変革について
宮 次男	実践女子大学教授	日本文化史 日本文化史演習 日本文化・思想史	日本中世における文学と絵画の連携
山下紀久枝	国際交流基金 日本語教育専門家	論文選読 文章表現研究	初級の文型指導について
山田 等	前沖縄国際大学	社会学 社会学演習	老いのとらえ方



ニュース

☆冬休みが終わり、新学期が始まった。学期の初めは、センターの日本側派遣教授の交代の時期であり、日本側主任教授、主任教授補佐、事務主任も今期で交代となる。すでに任期を終えて帰国された先生方、ならびにまもなく帰国される予定の先生方に、この紙面を借りて心から感謝の意を表したい。また、今学期新しくいらしゃった先生方に歓迎の意を表したい。今学期の派遣教授については、中国語版をご参照いただきたい。

☆センター大学院第4回口述試問(答弁)の準備作業がすでに始まっている。今年の日程は昨年までと異なり、口述試問を今年の9月中旬に繰り上げて行うことになった。日程の概略は以下のとおり。

3月1日申請申込開始、4月1日申請申込締切、6月1日論文提出締切、9月中旬口述試問。

センターでは口述試問申請等に関する通知をすでに出している。申請者は所定の期日までに申込まれたい。

☆日本学研究センターの業務および日本側専門家の教学・研究活動の便宜をはかるため、国際交流基金からマイクロバス1台(トヨタ、コースター・デラックス)が贈呈され、1991年2月12日午前11時、北京外国語学院专家楼食堂において贈呈式が行われた。国家教育委員会国際合作司趙永魁副司長、閻麗氏、北京外国語学院王福祥院長、外事処楊蔭恩処長、北京日本学研究センター李書成主任代行、陳海良副主任、在中国日本大使館荒義尚公使、山崎正親一等書記官、北京日本学研究センター戸川芳郎主任教授、及び日本側専門家がこの贈呈式に参列した。(なお、このマイクロバスは3月13日から通勤に使われている。)

☆1991年2月13日にセンター大学院第5期生が訪日し、15日夜、東京で歓迎レセプションが開かれた。訪日研究期間は6か月間。なお、研修コースの訪日研修日程は昨年まで2月であったが、6月に変更となった。

☆1991年3月28日(木)午後2時からセンター1階階段教室において、今学期の第1回目の公開講座(宮次男先生「日本中世における文学と絵画の連携」)が開かれる。今学期の公開講座の講義内容については「日本側派遣教師一覧」(中国語版)をご参照いただきたい。—— 多数の皆様のご参加をお待ちしております。 ——

センチター 一期末旅行真実記

——貴陽・安順・桂林・広州・海南島をまわる——

山田 等

1991年1月9日午前9時半、戸川先生以下13名が友誼賓館に集合し、北京空港へ向かう。この旅行は、貴陽・安順・桂林・広州・海南島をめぐる10日間の「長征」である。最初の目的地、貴陽はそぼふる雨で迎えてくれた。久しぶりの雨だ。

10日、安川頁の黄果樹瀑布へ片道4時間かけて行く。滝の裏側を通り抜け、周囲を一周する。道々に布依族の中高年女性たちが、手編み(?)の手提げ袋を売っていた。かれらは、それをひとつでも買っている者にはしつこくまとわりつかない。そこで、先生方は皆それを買って首からぶら下げていた。さながら通行手形のようなようであった。

11日、貴陽市内を見学。ガイドに、張学良が監禁されたという驕麟洞を見に行きたいと希望するが、ガイド本人が行ったことがないらしく、道行く人に聞きながらようやくたどり着いた。驕麟洞という看板の奥に洞穴があった。私は、真っ暗な洞窟のなかで息を整えながら、ここに監禁された張学良たちの無念さをしのんでいた。とその時、洞窟の入口脇にあった掘って立て小屋の方から、「そこじゃないんですって、この建物ですってえ」の声。私は、張学良と同じく無念さを押し殺しながら、その小屋＝囚禁室へ向かった。

12日、午前3時！起床。4時19分の汽車に乗る。19時間後の午後11時19分、木圭木木に到着。大津山先生いわく「目がくさるほど寝た」旅であった。13日、桂林からバスで2時間ほどの、秦の始皇帝がつくった世界最古の運河である霊渠に行く。14日、いよいよ漓江下りだ。私たちはこれから始まる山水画の世界に心躍らせ、予想したよりは大きな70人乗りの船に乗り込んだ。ところがその中は、日本の農協団体のおじさんたちの熱海式猥雑さと中国の青年たちの京劇的トランプ騒ぎの一大オペラの世界であった。私たちは、もっさりとした数々の山やそれらが霧と雲の間に見え隠れする様を眺めながら「オペラ」を味わったのだった。

15日、桂林市内を参観したのち、空路「食の都、広州」へ向かう。昼食、まあまあ味の味。晚餐に期待するも、海老を追加注文せざるをえなかった。食事の不満つもの。

16日、早朝、空路海南島へ。暖かい。バスにゆられて興隆温泉に向かう。しかし、私たちのホテルには温泉は無かった。17日、島の南端の三亜に向かう。きれいな海岸線の向こうはベトナムだ。観光などの開発が進んではいるが、同時にここは海軍基地を抱える要衝なのだ。18日、島を南から北へ縦断。途中、苗族の村や通什の民族博物館を見学。通什では山下先生が下車。その後の消息はない(1月30日現在)。夜は海口市を散策。南国らしい賑わいを味わう。19日昼過ぎ、北京に帰る。「長征」は終わった。バスの中、小熊リリィ嬢の「ヨーイーピングエンに帰るんだぞー」の元気な声が響いていた。